

令和7年度後学期学位授与

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

沖縄県立看護大学大学院

保健看護学研究科

はしがき

本書は、学位規則（昭和 28 年文部省令第 9 号）第 8 条の規定により、令和 7 年度後学期に博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨の公表を目的として集録したものである。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論 文 題 目	頁
沖看大博第 29 号	博士(看護学)	安仁屋 優子	小島嶼における自立高齢者 の関係性ウェルビーイング —伝統行事と経験・意味づけ の生成・変容過程—	・・・ 3

氏名	安仁屋 優子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第 29 号
学位授与年月日	令和 8 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	小島嶼における自立高齢者の関係性ウェルビーイング —伝統行事と経験・意味づけの生成・変容過程—
論文審査委員	主査 教授 佐久川 政吉 副査 教授 田場 由紀 副査 教授 瓜崎 貴雄 副査 教授 神里 みどり

博士論文要旨

1. 目的

小島嶼に暮らす高齢者のウェルビーイング（Well-being : WB）は、都市部で構築された指標や個人の心理状態に還元する理解だけでは捉えきれない。その理由は、小島嶼では地理的近接性、人口規模の小ささ、伝統行事を基盤とした生活文化が日常と連続しており、住民同士の関係性と伝統行事のなかで関係性ウェルビーイング（Relational Well-being : RWB）として日々生成・更新されるためである。

本研究の目的は、小島嶼 A 島に暮らす自立高齢者の RWB が、伝統行事という場において、個人的・社会的・環境的相互作用として、時間的・空間的文脈のなかでいかに生成・変容していくのかを明らかにすることである。さらに、RWB の生成・変容過程の記述と解釈に基づいて RWB の構造と特徴を帰納的に整理し、島嶼看護の方向性について示唆を得ることを目指す。なお、本研究における RWB は「他者・環境との相互行為を通して、幸福感、充実感、地域とのつながりの経験や意味づけが、時間と場の中で生成し、変容していく過程」のこととした。

2. 方法

研究手法はフォーカスト・エスノグラフィーとした。2025 年 7 月～2025 年 10 月にかけて、2～3 日間の短期滞在を複数回行う往還型フィールドワークを実施し、ウンナー、シヌグ、豊年祭の伝統行事に参加観察した。フィールドノート、ボイスノート、写真・動画を収集するとともに、自立高齢者 3 名へのフォーマルおよびインフォーマルインタビューを行い逐語化した。分析にはスプラッドリーの参加観察分析手順を用い、サラ・ホワイトの RWB の個人的・社会的・環境的要素から分析した。

3. 結果

小島嶼における 4 つの伝統行事における役割分担、身体的協働、声かけなどの相互行為は以下の特徴を持つことが明らかになった。第一に、日常空間が祝祭空間へと変容する過程で、世代・地域内外・役割の境界が一時的に緩和され、「誰でも輪に入れる」柔らかな共同体感覚が立ち上がる。第二に、火や身体的競い合いといった危うさを共に引き受ける経験が、世代間の信頼と結束を締め直す契機となる。第三に、子どもが「神様になる」変容や「宝としての承認を通じて、継承の担い手として位置づけられる。第四に、言葉による指示ではなく、見守り・模倣・気遣いといった身体を介した相互行為によって、文化の継承とケアが同時に編まれていた。

また、A 島で暮らす研究参加者を対象に、島での暮らしにおける相互行為を通じた幸福感、充実感、地域とのつながりの経験や意味づけを分析した。島生まれの研究参加者は、祖父・父から受け継いだ根性を土台に、病気や出産といった節目を乗り越えてきた。幼少期からグスクに守られ癒される経験を重ね、それが島を守りたいという思いへと昇華し

ていた。同級生や隣近所との支え合いの中に共同体の喜びを見出し、伝統行事の継承を通じて次世代を支えながら、島を「ここ以外にない居場所」として満ち足りて暮らしていた。定年後に移住した研究参加者は、幼少期から家族で続けた墓参りを通じてルーツへの結びつきを確かめ、先祖の墓を守るため移住を決意した。豊年祭や健康活動への誘いを通じて「内側の人」として受け入れられ、現在は声掛けを大切にしながら公民館を拠点とした地域づくりを実践していた。島で生まれ育ち、2拠点生活の研究参加者は、親から受け継いだ義理感覚を土台に、多世代を見守り育て合いながら、祭りや地域活動を通じて島の関係性と環境を次の世代へつなぐ実践となっていた。

さらに、研究参加者の経験や意味づけの比較から、支え合い・見守りの関係、先祖・祭祀の重視、世代間継承への関心、島で老いることの愛容、島への帰属志向という共通性が認められた。一方で、多様な経験として生活史に根ざした「島への結びつきの起点（島を居場所として支える根拠の相違）」の違いにより、関わりの軸（運営／相互性／ケア）や、充足感、拠り所、継承、老い、環境への向き合い方、島への思いとして異なる様相が示されていた。

4. 結論

- 1) 研究参加者は、幸福感・充実感・地域とのつながりを、行事参加という単発の出来事ではなく、他者・環境との関係が更新され続ける過程として語っていた。
- 2) 関係性ウェルビーイングは、個人的・社会的・環境的要素が相互に結びつき、重なり合いながら編み直される過程として捉えられた。
- 3) A島の生活条件（近接性、互助関係、祭祀文化、自然環境等）は、経験と意味づけの過程に具体的に織り込まれる条件として作用していた。
- 4) 島嶼看護における方向性として、日常生活と伝統行事を一体として捉え、生活史に沿って高齢者の「生きる線」と地域の多様な線が結び直される過程を支えることを、実践の中核とすることが重要である。

博士論文審査結果の要旨

本論文の着眼点は、人口減少と高齢化が同時に進行し、伝統行事の担い手構造が変容しつつある小島嶼という固有の社会・文化的文脈において、高齢者を単なるケアの受け手としてではなく、日常生活および伝統行事を支える担い手として捉え直した点、関係性ウェルビーイング (Relational Well-being : RWB) を日常生活および伝統行事における相互行為のなかで生成・変容する過程として明らかにしようとした点にある。また、ウェルビーイング (Well-being : WB) を個人内の状態や無的指標としてのみで把握するのではなく、島嶼の生態的・文化的文脈のもとで、個人的・社会的・環境的要素が相互作用しながら立ち現れる過程として捉える点に、本研究の独自の着眼が認められる。

本研究は小島嶼に暮らす自立高齢者の RWB が、伝統行事という場において、個人的・社会的・環境的要素の相互作用として、時間的・空間的文脈のなかでいかに生成・変容していくのかを明らかにすることを目的とし、フォーカスト・エスノグラフィーを研究方法として、参与観察とインタビューを組み合わせた質的研究を実施している。研究方法の妥当性は、以下の点がある。

第一に、本研究は尺度調査や単発のインタビューでは把握が困難な、小島嶼に固有の文化的文脈および生活世界の厚みを捉えるために、伝統行事への参与観察を中核とするエスノグラフィーを採用している。伝統行事を、役割分担、身体的協働、声かけ等の相互行為が集中的に生起する場として位置づけ、伝統行事と当事者の語りを統合的に解釈する方法は、高齢者の RWB の生成・変容過程を明らかにしようとする本研究の目的と適合している。

第二に、複数回の短期往還型フィールドワークによるフォーカスト・エスノグラフィーの枠組みに基づき、伝統行事当日のみならず、準備期間および関連する地域活動を含めて継続的に現地に関与している。このように、当事者の意味世界 (emic) と研究者の分析視点 (etic) とを往還させながらデータ収集と解釈を行うことにより、RWB が生成・変容していく過程を、生活および文化の文脈のなかで把握することを試みている。

第三に、参与観察、フォーマルおよびインフォーマル・インタビューを組み合わせ、言語的データと非言語的データを相互補完的に用いて分析を行っている。伝統行事における住民の身体の動き、相互行為、場の雰囲気と、高齢者自身の語りとを相互参照しながら解釈する方法は、RWB を経験とその意味付けとして捉える本研究の目的に整合している。

第四に、フィールドノート、ボイスノート、写真・動画記録を併用し、場の状況や研究者の身体感覚を含めた多面的な記録を残すことにより、言語化されにくい体験的・感覚的側面をデータとして取り込んでいる。これにより伝統行事の場における非言語的相互作用や感情体験を含めて多層的に捉えることに努めた。

第五に、スプラッドリーの参与観察法およびドメイン分析を基盤とし、逐語録およびフィールドノートを用いて文化的意味の領域を抽出し、文化的テーマへと統合する分析手順を明示している。

以上より、RWB の生成・変容過程を解明するために適切に構成されており、研究目的に

照らして妥当性のある研究方法と評価できる。

本論文の独創性は、小島嶼において人間関係の重要性自体は先行研究において指摘されてきたものの、それが高齢者の生活においてどのように、いかなる意味をもって重要であるのかを、当事者である高齢者の立場から明らかにした点にある。すなわち、小島嶼に暮らす高齢者が、日常生活および統行事における他者・地域・環境との関わりを通して、幸福感や充実感、地域とのつながりをどのように経験し、意味づけているのか、その RWB の生成・変容過程を質的に記述した点に、本研究の特徴が認められる。

また、本研究成果の優れた点は、従来の看護学研究においてみられる QOL や健康状態を中心とした量的評価とは異なり、WB を小島嶼の文化的・生態的文脈のもとで、個人的・社会的・環境的要素が相互に作用しながら時間のなかで生成・変容していく過程として捉え、自立して暮らす高齢者の日常生活および統行事を支える様相そのものを分析対象として描き出した点にある。これにより、小島嶼に暮らす高齢者が、地域のなかで生きる主体として、どのように関係を築き、幸福感、充実感、地域とのつながりを経験し意味づけているのかを具体的に示している。このように、高齢者自身の語りと参与観察を通して、日常生活および統行事を支える担い手としての様相を可視化し、小島嶼の生活・文化の文脈に即した RWB の具体像を提示した点は、従来の島嶼保健看護に関する研究には十分にみられなかった新たな知見である。

ただし、審査委員会での指摘として、以下の課題があった。

- ①本研究で用いている主要な概念や用語の定義について、理論的枠組みおよび先行研究との対応関係を確認したうえで、本研究の文脈に即した形になるよう見直し、必要な修正を行うこと。
- ②研究協力依頼文に示した研究の主旨と、論本文に記載されている内容との間に一部不整合な箇所があるため、依頼文に基づいてデータが収集された経緯を踏まえ、研究目的、研究課題、研究方法および結果のつながりが分かるように整理し、全体として一貫性が保たれるよう修正すること。
- ③研究方法の記述について、特に参与観察の実施方法や手続き、研究の進め方に関する説明が十分とは言えないため、観察の方法、期間、研究者の関わり方などが第三者に分かるよう、必要な内容を補足して記載すること。
- ④本文中に「状態」などの抽象的な表現が多く用いられていることから、それぞれの語句について、本研究における意味が伝わるよう、定義の明確化や表現の見直しを行うこと。また、「文化実践」「文化的実践」「生活世界」「生活実践」「生活過程」など、概念の整理や用語の定義が求められる語句全般も同様である。
- ⑤図 11、図 12、図 13 について、図の内容と本文の記述との対応関係や、図から読み取れる意味や根拠の説明が十分ではないため、各図が示している内容が第三者に分かるよう、本文中で説明を補足するなどの修正を行うこと。
- ⑥論文全体について、研究者自身の記述と引用部分の区別、引用文献の記載方法、段落構成、図表と本文との対応関係、研究の限界と課題と結論の配置や構成順など、論文

執筆上の基本的な事項について再確認し、学術論文として適切な形となるよう修正すること。

これらは、研究指導教員の指導のもと、加筆・修正することとなった。

以上より、審査委員会は、本論文が博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認め学位授与に値すると判断した。

博士学位論文

令和8年3月発行

編集・発行

沖縄県立看護大学大学院

保健看護学研究科

〒902-8513 沖縄県那覇市与儀 1-24-1

TEL 098-833-8800